

わたしの室蘭へのこだわり―ノスタルジーを超えて

清 末 愛 砂

二〇一一年九月末、わたしは島根県松江市から室蘭市に移った。西日本出身のわたしにとって、北海道は後述することを除き無縁の地であり、一度だけ日帰りで札幌に来たことがあるだけだった。雪が比較的多い松江での生活経験から、雪国での生活は恐れていながらも、寒さに耐えることができるかどうか不安であった。

前職時代に他大学への異動を考えたとき、二つの候補地―沖縄と北海道―が頭に浮かんだ。いずれかの地、とりわけアイヌが比較的多く住んでいる道南で植民地主義と戦争の観点から日本の負の近現代史を学びたいと思うようになっていたからである。そう希望したところで、両地域にある大学がわたしを採用するかどうかはわからない。ともかく、公募情報が流れれば応募する以外に手がかりはなかった。

応募の機会はほどなくやってきた。道南にある室蘭工業大学が憲法学担当教員の公募を出したからである。これ幸いとばかりに飛びつくように応募し、幸運なことにポストを得ることができた。そうして、わたしの室蘭生活が始まった。

室蘭生活の二年目から、研究や講演等で頻

繁に札幌に行くようになった。移動が多いわたしの生活を見かねた友人から、何度も札幌に引越すよう助言された。しかし、心が揺れ動きながらもこれまでそうせずにきた。それは当初の目的のためでもあったが、もう一つは室蘭という町に離れがたさを感じてきたからである。

北海道と無縁の生活を送ってきたとはいえ、幼い頃から室蘭という地名だけは知っていた。大手製鉄企業の技術者であった亡父から、幾度となく聞かされてきた「新日鉄室蘭」の存在。しかし、恥を忍んで書くと、わたしはここに

来るまで一九五四年の日鋼室蘭闘争が戦後最大の労働争議であったということを知らなかった。その視点が抜け落ちていた理由ははっきりしている。亡父から聞かされていた室蘭とは、日本の産業界を支えてきた企業の「エリート社員」の視点からみた工業都市であったからだ。また、わたし自身が「鉄の町・室蘭」が誰の手により、また誰の犠牲の下でつくられたのか、という点を深く探求しようとしてこなかったからである。この重大な歴史的事実を知ったとき、植民地主義や戦争の視点から近現代史を考えたいというわたしの意識があまりにも浅はかなものであったこと

を認識せずにはいられなかった。

室蘭への離れがたい感情はどこから湧いてくるのか。母は実家がある大分県でわたしを出産したが、わたしたちはすぐに亡父が待っている山口県徳山市（現在の周南市）に帰った。それから大手企業のコンビニナートが広がるその町で約一二年もの月日を過ごした。その後は亡父の転勤や学業、就職の關係で、国内では東京、大阪、京都、神戸、松江、国外ではシンガポール、英国、パレスチナを転々と移動してきた。こうした生活を経ても、幼い頃のわたしの生活を形成した徳山は自分の故郷であり続けた。室蘭で初めて港と工場の煙を目にしたとき、既視感におそわれた。しかし、それは単に見慣れた徳山の光景が瞬時に重なっただけだった。二つの町がそっくりだったからである。そこからわたしは室蘭に強いノスタルジーに似たものを感じるようになり、離れがたくなった。

しかし、わたしはそうしたノスタルジーにいつまでもひたっているわけにはいかないと思っている。なぜなら、住めば住むほど、この町の形成から現在にいたるまでのさまざまな矛盾―大日本帝国を支えた軍需産業都市としての歴史、企業の景気に左右されてきた地元経済と住民の生活、港の軍事利用の可能性等―を考えずにはいられないからだ。この町にとことんこだわること、わたしは当初の目的を果たしたい。

ハきよすえ あいさ・室蘭工業大学大学院工学研究科准教授